

子ども自らが試し、考え、達成しようとするために

～0歳からの「科学する心」の芽生えを培う～

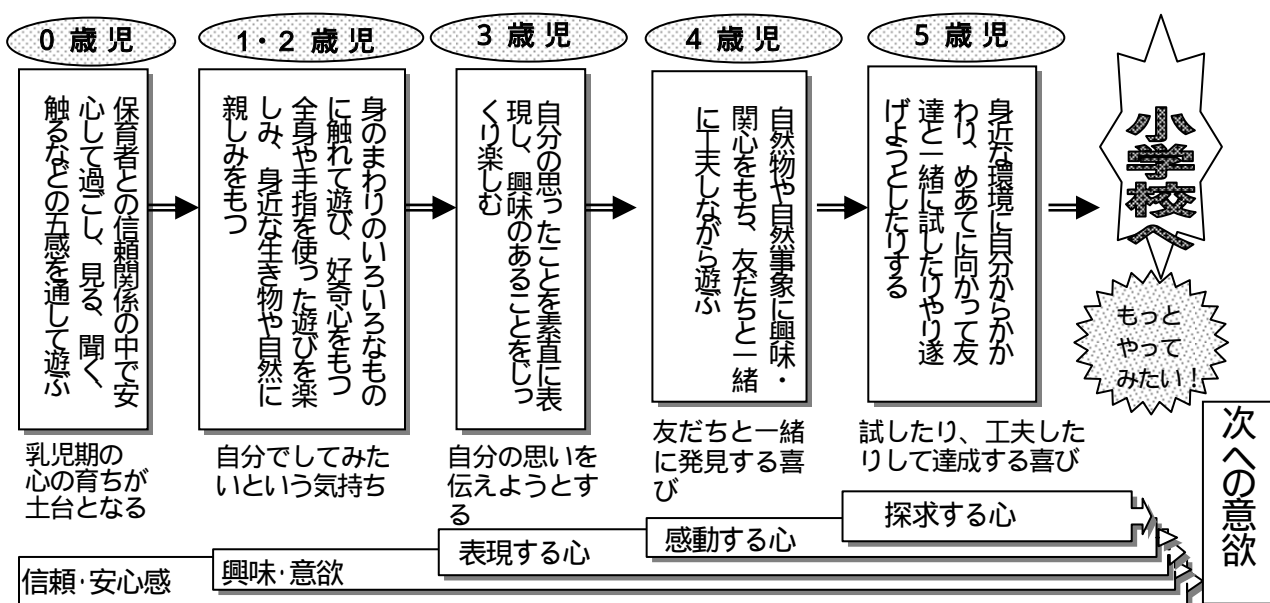
なかの保育園（島根県出雲市）

1 主題の受け止め

子どもたちが生活や遊びの中で、「どうして？不思議だなあ」と興味を持ち好奇心をふくらませていく姿は、科学する心の芽生えであると捉えている。子どもたちの気付きを感じた時に保育者が見通しをもち、年齢に合った環境構成を工夫していくことで「やってみよう！」という次への意欲につながっていくと思う。

それぞれの年齢の子どもたちが、自分なりの思いを表現し試そうとする過程の中で、発見や喜び・感動があり、「おもしろいなあ」「わかったぞ！」という満足感や、充実感を得ることができる。この心を育てることが、子どもたちの「科学する心」の育ちにつながると考える。

2 研究の構想



研究の目標 0歳からの「科学する心」の芽生えを培う。

自然体験から広がる好奇心を、子ども自らが試し、考え、達成しようとするための環境構成と援助について追求していく。

研究の仮説 乳児期に大切な五感を揺さぶる様々な体験や環境を工夫していけば、豊かな心を育てていくことにつながるであろう。

子どもの「なぜ?」「どうして?」という気持ちや、興味、関心を受け止めながら子どもとともに活動や生活を進める中で保育を工夫することによって、子どもの見つけた遊びがより満足のいくものになり、好奇心、創造力、考える力が育っていくであろう。

研究の方法

- ・年齢ごとに「科学する心」の捉えについて話し合い、職員が共通理解する。
- ・子どもたちが興味関心をもっている遊びに、じっくりと取り組み、継続していけるような保育の工夫と遊びの展開を予想した環境構成の工夫をしていく。
- ・日頃の保育の中で、実践事例の記録をとり、考察を重ね、全体での研究を深めていく。
- ・保育年間計画の中で、科学する心を育むための取り組みに見通しをもち、保育者の援助の仕方や環境構成について考えていく。
- ・子どもたち一人ひとりの育ちを大切に受け止め、次の年齢へつなげていくために、個々に応じた援助をしていく。

3 実践

1歳児事例 水、砂、土などに触れ、思い切り遊びを楽しむ。

- ・ベトベト、ドロドロの感触を楽しむ ・水を移したり、流したりして遊ぶ
- ・保育者のまねをしながら遊ぶ <実践事例集 vol.5 21頁「C-2 あれ なーい!」 参照>

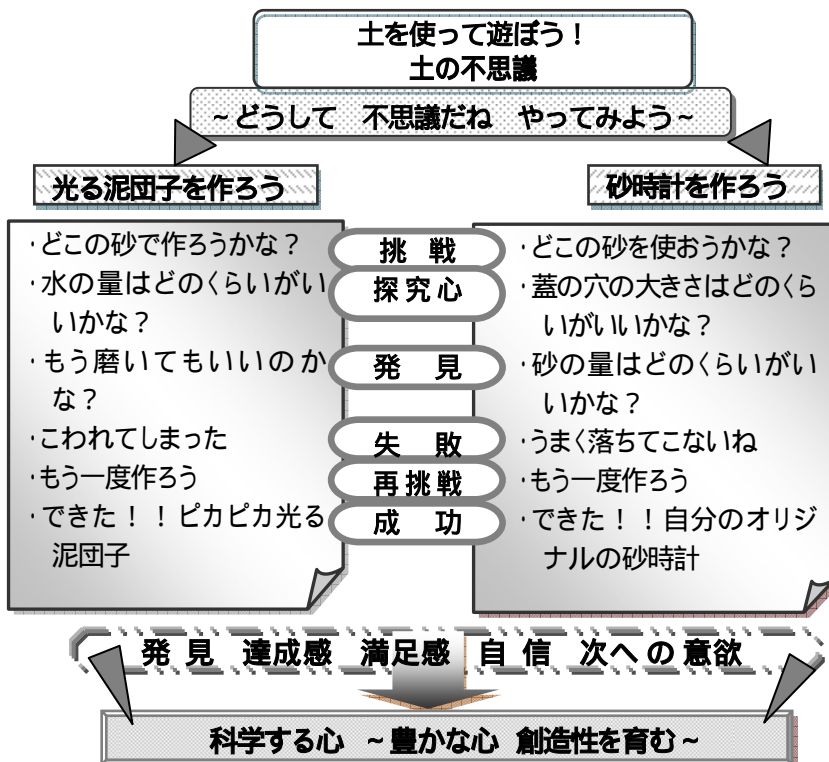
3歳児事例 泥団子を転がす遊びを通して自分の興味のあることをじっくり楽しみ、思いを表現する。

- ・泥団子を転がそう ・壊れない硬い団子を作ろう ・といを使って転がそう
- ・築山から転がしてみよう ・競争しよう ・どのだんごが速いかな?

<実践事例集 vol.5 30頁「4 なんで下まで行くと壊れるのかな?」 参照>

5歳児の事例

泥団子作り<事例1>
 “ピカピカの泥団子が作りたい”という意欲から、泥団子作りが始まったが、すぐにうまくはいかず、「どうしてかな」「こうしたらどうだろう」と予想し、考え・試すことを繰り返す姿が見られた。その中で、水加減や小石の混じっていない砂で作ること、また保管の仕方を工夫するといいいという発見があった。また、友達の工夫している姿を見ることで、「自分もやってみよう」と刺激し合っていた。



子どもの姿	保育者の気付きと支援
<p>仮皮膜作り<事例2> 団子作りを始めて数週間が経とうとしている。さらに団子作りを熱心にする姿が見られる。団子ができた子は、次の段階の皮膜となるきめの細かい土を作り始めた。園庭のいろいろな場所で作るうちに、たくさんのが分かってきた。</p> <p>気付いたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(雨上がりの)湿っている土はザルの目から落ちないため作れない ・よりきめの細かい土がよい ・集めたサラフワの土を乾かしたものが団子作りには向いている <p>自分たちで試しながら、これらのことに気付いたようだった。集めたサラフワの土を乾かして、仮皮膜作りを始める。園庭に出ると、何度も何度も丁寧に乾かしたサラフワの土をかけていく。座り込んだまま動かず、夢中で皮膜作りをしている子もいる。</p> <p>皮膜作り 仮皮膜ができてくると、次はいよいよ皮膜作りが始まった。ここからは、土を振りかけるのではなく、地面をなでまわして乾いた細かい土を手につけ、手で少しずつこすりつけていった。毎日繰り返すことで手つきもだんだんと慣れてきて、全体にまんべんなく粉のような土がかかっていった。少しずつ皮膜もできてきて表面がきれいになり、まんまるの団子になってくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしたらよりいい土ができるのか考えていた。自分たちでいろいろと試している姿がある。その中で、子どもなりの発見があり、工夫している姿が見られる。 ・やっと皮膜作りの段階になり、団子を光らせることを楽しみにしている子どもたちである。成功できるように保育者も見守っていきたいと思った。

【考察】友達同士、考えを出し合いながら何度も試していた。その中で、皮膜作りではサラフワを乾かして使うことやきめの細かい乾いた土がいいことを発見した。新しい発見から、“光る泥団子を成功させたい！”という子どもたちの強い意志が伝わってきた。

4、科学する心の育ち

1歳児	砂や水に触れてのおそびを通して、自分の興味のあることを繰り返し楽しむ姿があった。子どもたちのしたい遊びができる空間や素材を工夫することで、「自分でやってみたい！」という気持ちが高まった。
3歳児	泥団子作りや“とい”に転がす遊びから、どうすると壊れない団子ができるか、よく転がるか自分なりに考える力、思いを表現していく力が育った。
5歳児	泥や砂を使った遊びを通して、さまざまな砂の種類、性質に気付き、めあてに向かって友達と一緒に試したりやり遂げようとしたりする姿があった。よく光る泥団子や砂時計を作りたいという共通の目的をもって活動に取り組むことで、仲間同士のつながりが深まり認め合う気持ちが育ってきている。

みどころ

1歳児、3歳児、5歳児は明らかに興味もできることも違います。その違いやそれぞれの年齢の発達・特徴を捉える側面として、「科学する心の育ち」を視点にすることで、具体的な姿や保育者のかかわりが見えてきます。こうして分かったことは、環境や援助の在り方を探る手掛りになります。